

小学校における交通環境教育の導入の可能性に関する基礎的研究 ～総合的な学習の時間に着目して～

東京大学大学院 学生会員 中村 敦
東京大学大学院 正会員 大森宣暁

東京大学大学院 正会員 圓山琢也
東京大学大学院 正会員 原田 昇

1. はじめに

交通渋滞やそれに伴う環境問題を始めとする公共的問題の解決には、ロードプライシング等の「構造的方略」のみならず、各人の良識や道德意識をもって行動することを求める「心理的方略」が不可欠であり、そのための授業を学校教育に導入することが有効であるという主張がある¹⁾。また2002年度より全国の小中学校・高等学校で「総合的な学習の時間」（以下、総合学習と略称）が導入され、従来の教科の枠を超えた教育内容を扱えるようになり、その授業内容・効果に大きな期待が寄せられている。北海道では「かしこい自動車の使い方を考えるプログラム」を用いたTFPが実施され、交通環境教育ツールとしてプログラムが有効であることが示された²⁾。

本研究では、総合学習の実態を把握し、現在実施されている実験的な交通環境教育が、今後小学校の総合学習の中で用いられていく可能性を探ることを目的とする。なお、本研究での交通環境教育とは、環境問題と交通問題を中心として、生活・経済などの相互関連性を学習し、自然・社会環境を守るため各自で行う身近で簡単な手段についての教育を指す。

2. 総合学習の概要

総合学習とは、2002年度より全国の小中学校・高等学校で導入された新しい授業であり、各学習で得られた知識を総合的に働かせられるようにすることを目指す

に、体験学習や地域との連携による授業、異学年やグループによる作業など、その授業時間、カリキュラム、内容、形態、外部機関との連携など、授業に関わる全てが教員に任せられている授業である。

3. 総合学習の事例調査とヒアリング調査

東京都文京区の小学校での事例を収集し、また事例を踏まえた上で小学校の教員へのヒアリング（4校・5名）を行った。

（1）授業内容・年間計画

教科書を発展させたもの、児童の興味関心を基にしたもの、道徳や学級活動を延長させたものが多く、「まちあるき」「障害者・福祉」「環境（リサイクル）」「2分の1成人式」「英語教育」が主な単元である。学校毎に大きな差異が見られるわけではない。1単元当たりの授業時間数は15～30時間程度である。

（2）授業の進行方法

児童生徒の自主的な学習意欲を育むことを目標にしていることより、授業の多くは以下のような構成手順で行われている。

- ・ 教員によって与えられたテーマの中から児童各自の興味関心に合わせた課題の設定
- ・ 似たテーマを設定した者同士による文献・インターネット・インタビュー等によるグループ調査
- ・ 調査結果の発表会

1単元にかかる時間数が15時間程度の短期の場合、授

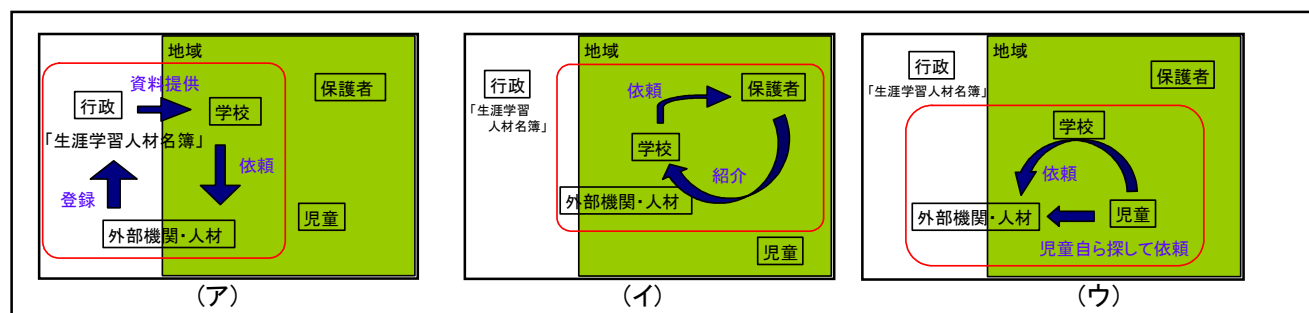


図1 外部機関との連携（3通り）

キーワード：総合的な学習の時間、交通環境教育、小学校

連絡先：〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1, Tel.03-5841-6234, Fax03-5841-8527

表1 総合学習の授業進行の比較

項目	興味関心重視型	テーマ固定型
授業内容と児童の興味関心の一致度	興味関心をできる限り拾っているので一致する。	必ずしも一致しないこともあり、児童により異なる。
学習の効果	児童の興味関心が学習のベクトルとは合わないことも多い。	効果があるようにテーマ・授業内容を設定する。
1単元の授業構成とその変更	変更がよく起こる。	基本的には決まった構成で進む。
学年ごとの系統的なつながり	保ちにくい。	学年の進級とともに授業内容もより高度な内容に積み上がっていく。
外部機関・人材との連絡・連携	授業毎に考える。必ずしも学校の依頼に対して外部機関が応えられるわけではない。	あらかじめ相手先が決まっていることが多く、依頼もしやすい。
保護者の協力体制	良好。	良好。
年度ごとの内容の変化	十分あり得る。	それほど大きく変わることはない。
外部教材の参入の可能性	児童の興味関心と一致すれば導入の可能性はある。	教育方針との合致など、ある程度の基準が達成されていれば導入の可能性はある。

業の進行によっては完全に作業が消化されないまま終了してしまうこともある。

（3）外部機関・協力機関との連携

総合学習においては、児童の調査およびゲストティーチャーとして地域の人材や外部機関との連携が重要であり、図1に示すようにその連絡の取り方には以下の3通りがある。

（ア）行政が作成し、学校に提供している「生涯学習人材名簿」を活用する

（イ）学校が保護者に対して、人材の紹介を依頼する

（ウ）児童自らの主体的な活動から、興味に沿う人材や外部機関を発見し、連絡をする

（ア）（イ）では、依頼が容易な半面、必ずしも児童や教員の希望通りの人材が見つかるわけではない。（ウ）では、児童の学習意欲が高く維持されるが、外部人材の都合に大きく左右されてしまうことが多い。

（4）保護者の協力体制

保護者を交えた発表会や、現地見学時の児童への同伴など、学校の適切な授業目的の説明により保護者の協力体制は良好である。

4. 交通環境教育の導入の可能性

小学校へのヒアリングの結果、総合学習の授業の進め方は表1に示すように、児童の興味を極力尊重して授業を組み立てる「興味関心重視型」と、あらかじめ学習効果を重視したカリキュラムを学年毎に設定する「テーマ固定型」の2通りがあることが分かった。いずれの進め方に関しても一長一短が認められるが、児童・教員の興味関心によっては外部機関との連携や教材導入が積極的に行われる。

しかし、交通環境教育を導入するにあたり問題となるのが、子どもと教員の交通環境に対する根本的な興味関心や意識の欠如である。現在展開されている渋滞

表2 文京区で使用されている教科書での交通・環境に関する単元・内容³⁾

教科	学年	単元	内容
社会科	3・4年生	わたしたちのまち みんなのまち	学校のまわりの、バスの通るところ 建物が集まる、にぎやかなところ (交通の様子)
		くらしをまもる	・交通事故から身を守る (警察官の仕事。自分達でできる安全・バリアフリー)
		すみよい暮らしを ささえる	環境をまもる(ごみ問題)
	5年生	わたしたちの県 わたしたちの国土 の環境	県内の交通の様子 生活と環境-環境と公害 自動車による大気汚染 わたしたちにできること
保健	5・6年生	けがの防止	交通事故によるけが

と環境問題を扱った交通環境教育では、特にその導入部分において児童の興味が引かれにくいことが指摘されている。また、例えば文京区で用いられている小学校の教科書での交通環境に関する単元は表2に示すように少なく、児童や教員が積極的に交通環境教育を総合学習で取り組む以前の段階として、交通環境への関心が育まれているとは考えにくい。従って児童や教師が積極的に交通環境に関する授業を取り入れていくという展開は期待できない。

5. まとめと今後の課題

総合学習で交通環境が導入されるためには、総合学習の授業進行に合わせやすい教材、また、より児童に身近で取り組みやすい教材を開発する必要がある。

今後の課題として、実際に児童にとって身近な交通環境教育の教材を考案し、小学生に実施することが挙げられる。

参考文献

- 1) 藤井聡：公共的問題を題材とした学校教育プログラムについての基礎的考察，土木計画学研究・論文集，Vol. 20, No. 1, pp. 105-109, 2003
- 2) 谷口綾子，原文宏，新保元康，高野伸栄，加賀屋誠一：小学校における交通・環境教育「かしこい自動車の使い方を考えるプログラム」の意義と有効性に関する実証的研究，環境システム研究論文集 Vol. 29, pp159-169, 2001
- 3) 文部科学省検定済教科書，新しい社会，東京書籍